

近代東京語における係助詞「は」の 融合転化現象に見られる一傾向

——夏目漱石の小説を資料として——

田 立 立

1. はじめに

現代標準語の直接の母胎となったものが近代東京語であることは言を俟たないが、決して近代東京語がそのまま標準語として採用されたわけではなく、その過程において種々の点で取捨選択が行われている。その意味で、近代東京語の詳細を明らかにすることは、単に江戸・東京語自体の変遷の問題にとどまらず、標準語形成の具体的プロセスを解明する上でも貴重な手がかりを提供する重要性を有しているものと思われる。

そこで、そのささやかな試みの一つとして、本稿では、明治末期～大正初期東京語を精細に描写していると考えられる夏目漱石の小説を資料として取り上げ、語連接上の融合転化現象、就中係助詞「は」と前接語との融合転化——以下「融合化」と略称する——に着目して考察を行っていくことにしたい。

2. 分析対象と調査方法

本稿で分析対象とする具体的な夏目漱石の小説は、東京を舞台とし、登場人物が東京語を使用する『吾輩は猫である』(明治38-39年<1905-06>発表)『三四郎』(明治41年<1908>発表)『それから』(明治42年<1909>発表)『明暗』(大正5年<1916>発表)の4作品である。したがって、今回問題とする「近代東京語」とは上述の通り、直接的には明治末期から大正初期にかけて——略々20世紀初期——の東京語ということになる。

調査方法としては、ある語に係助詞「は」が後接した際、その連接部分において出現した融合転化形——以下「融合形」と略称する——の用例をすべて拾い上げ、それらを前接音節および前接語の観点から整理し⁽¹⁾、考察のデータとすることを基本とする。

なお、接続助詞「て」＋「は」が融合した「テワ→チャ」および、形容動詞連用形/断定の助動詞「だ」連用形/接続助詞「て」連濁形の「で」＋「は」が融合した「デワ→ジャ」の2者については、他と性格が大きく異なるため、今回は考察から除外した⁽²⁾。調査・引用テキストには、岩波書店刊の最新版「漱石全集」——詳細は「主要参考文献一覧」参照——を使用した。

以上のような方針に則り、今回採集された全融合パターンを五十音順に示し、その具体的全語例と用例数を掲げたものが稿末の「別表⁽³⁾」である。

3. 考察

3. 1. 概観

初めに、「別表」により、今回出現した融合パターンについて概観してみよう。

具体的には、作品ごとに各「非融合形」がそれぞれどのような「融合形」に変容しているかを見てみることにしたいが、その状況を把握しやすくするために、非融合形が融合形に変容する音変化の仕方を類型化して、

- ①w脱落型 : 「オレ(己)+ワ→オレア」の類
- ②ヤ転化型 : 「キ(来)+ワ→キヤ」の類
- ③拗音化型 : 「ニ(格助詞)+ワ→ニヤ(一)」の類
- ④ア列音化型 : 「ヨク(好)+ワ→ヨカ(一)」の類

の4種の「融合型」を立て、その融合型の観点を中心にまとめたのが以下のリストである。

なおリスト中、〈1形〉はその非融合形が1種類の融合型のみに、〈2形〉は2種類の融合型に、〈3形〉は3種類の融合型に、それぞれ変容していることをいう。

『吾輩は猫である』

〈1形〉

- ①w脱落型 : ラワ、ワワ
- ②ヤ転化型 : イワ、エワ、テワ、デワ
- ③拗音化型 : ニワ、ミワ、リワ
- ④ア列音化型 : ゴワ

〈2形〉

- ②+③ : キワ
- ①+④ : クワ、トワ、ノワ

〈3形〉

- ①+②+③ : シワ、レワ

『三四郎』

〈1形〉

- ①w脱落型 : ×
- ②ヤ転化型 : イワ、シワ、テワ
- ③拗音化型 : ニワ、リワ
- ④ア列音化型 : トワ、ノワ

〈2形〉

②+③：レワ

『それから』

〈1形〉

- ①w脱落型 : ×
- ②ヤ転化型 : イワ、テワ、デワ
- ③拗音化型 : ニワ、リワ
- ④ア列音化型 : クワ、トワ

〈2形〉

②+③：キワ、シワ、レワ

『明暗』

〈1形〉

- ①w脱落型 : ツワ
- ②ヤ転化型 : イワ、エワ、ケワ、ジワ、セワ、テワ、デワ、メワ
- ③拗音化型 : チワ、ニワ、リワ
- ④ア列音化型 : クワ

〈2形〉

②+③：キワ、シワ、レワ

上記リストからまず、4作品のうち『吾輩は猫である』だけが〈3形〉を備え〈2形〉にも2パターンを有するなど、全体として『吾輩は猫である』における変容パターンが一番バラエティに富んでいることが分かる。

さらに、より細かく全体的特徴を見るため、作品ごとに各融合型の延べ用例数をまとめてみたのが下表である。

【表】漱石4作品における各「融合型」延べ用例数

	吾輩は猫である	三四郎	それから	明暗	計
①w脱落型	17	×	×	1	18
②ヤ転化型	29	9	24	54	116
③拗音化型	161	34	41	206	442
④ア列音化型	31	3	5	12	51
計	238	46	70	273	627

上表によれば、4作品全体として、出現回数は③拗音化型>②ヤ転化型>④ア列音化型>①w脱落型の順となっているが、前2者と後2者との間にはかなり大きな段差があることが見て取れる。具体的には、②・③の合計558例(89.0%)に対し①・④の合計69例(11.0%)となっており、①w脱落型・④ア列音化型に比して②ヤ転化型・③拗音化型の用例数は際立っている。作品別に見ても(②と④が拮抗した値を示している『吾輩は猫である』

以外の3作品は)やはり全体的傾向と一致している。

3. 2. 前接音節からの分析

3. 2. 1. 融合型と前接音節との対応関係

次に、各融合型とそれに対応する前接音節が五十音図の何列音なのかについて整理してみたところ、次のようになった。

- ①w脱落型 : ア・イ・ウ・エ・オの全列音
- ②ヤ転化型 : イ列音・エ列音
- ③拗音化型 : イ列音・エ列音
- ④ア列音化型: ウ列音・オ列音

ここで注意されるのは、②～④の変容は音声学的にみな①w脱落の過程を経た音変化なので、結果として、①は潜在的に②～④の中に包摂されていることである。その意味で、②～④に属するイ・ウ・エ・オの各列音はすべて①w脱落型を取ることも可能ということになる(上記の通り、実際そのようになっている)。一方、イ・エ列音が属する②・③とウ・オ列音が属する④とは前接音節に含まれる母音の点で共通する部分がなく、互換性のない対立の関係にあると言える。すなわち、②・③に属しているものが④を取ることは不可能である。

したがって、融合型の組合せについて理論的に可能なのは、次の5通りとなる。

$$[\textcircled{1}+\textcircled{2}, \textcircled{1}+\textcircled{3}, \textcircled{2}+\textcircled{3}, \textcircled{1}+\textcircled{2}+\textcircled{3}] \longleftrightarrow [\textcircled{1}+\textcircled{4}]$$

「3. 1. 概観」で、全体的特徴として①～④の中で①w脱落型と④ア列音化型の用例数が少ない傾向を指摘したが、その少数派についてももう少し見てみることにしよう。ただし、①w脱落型は既述のように、すべての変化型の中に共通して含まれる要素のため、ここでは特に④ア列音化型について取り上げることとする。

そこで、「別表」により④の全語例を確認してみると、

ウ列音→ア列音化: 形容詞連用形語尾ク

オ列音→ア列音化: 「と」(格助詞)「な(ん)ぞ」(副助詞)「の」(準体助詞)

のように、活用語尾と助詞という文法的要素から構成されており、いわゆる助辞類に限定されていることが分かる。

この④について、さらに下記の実例⁽⁴⁾を見てみよう。

1 「どんなです。^{いた}痛かないでせう」(明135-8)

2 「〈前略〉先生^{ちが}た余つ程違つてますね。〈後略〉」(そ56-12)

3 「椎茸で前歯がかけるなんぞ、何だか爺々臭いね。〈後略〉」(猫26-12)

4 「少し無理ですがね、かう云ふなどうでせう。可哀想だた惚れたつて事よ」(三387-11)

これらから、④ア列音化型においては、

ウ列音→ア列音化：イタク(痛)+ワ→イタカ

オ列音→ア列音化：ト+ワ→タ、ナ(ン)ゾ+ワ→ナ(ン)ザ、ノ+ワ→ナ

のように、融合形のカタチが詰まり過ぎ、前接音節の元の語形が完全に潰されてしまっていて認識しづらくなっていることが注意される。

それに対し、多数派の②ヤ転化型と③拗音化型の方は、

5 「なに彼奴ぢやわ分らない。何をな買つて来るかく知れやしない」(明60-2)

6 「兄さん、こりや[リヤ]もう済んだの。まだす食べな掛けなの」(明310-14)

のように、

ヤ転化：シレ(知)+ワ→シレヤ (動詞連用形語尾+は)

拗音化：コレ(是)+ワ→コリヤ (指示代名詞+は)

と、前接音節の元の語形を保つか名残りをとどめているかで、いずれも前接音節を見分けやすいカタチとなっている。

このように見てくると、明治末期～大正初期東京語における係助詞「は」の融合化に際し、②ヤ転化型と③拗音化型が多数派をしめることによって、前接音節の語形が完全に壊されることがないように変化する強い傾向が示されていると言えるだろう。

3. 2. 2. 融合型と語類との対応関係

ある非融合形の取る融合型が2通り以上ある場合——先に〈2形〉〈3形〉と示したもの——について、今度は前接音節にとどまらず、その前接語全体にまで目を向けそれらを語の種類——以下「語類⁽⁵⁾」と略称——別に整理したものが以下に掲げるリストである(煩雑になることを恐れ、各語例は最小限を例示するにとどめた)。

キワ→キヤ・キャ

「動詞連用形+は」：キ(来)+ワ→キヤ、ヒキ(弾)+ワ→ヒキャ

「普通名詞+は」：トキ(時)+ワ→トキャ

クワ→クア・カ(ー)

「人称代名詞＋は」：ボク(僕)＋ワ→ボクア

「形容詞連用形＋は」：イタク(痛)＋ワ→イタカ、ヨク(好)＋ワ→ヨカー

シワ→シア・シヤ・シャ

「普通名詞＋は」：キョーシ(教師)＋ワ→キョーシア

「動詞連用形＋は」：シ(為)＋ワ→シヤ、ハナシ(話)＋ワ→ハナシヤ

「人称代名詞＋は」：ワタシ(私)＋ワ→ワタシヤ

「副詞＋は」：スコシ(少)＋ワ→スコシヤ

トワ→トア・タ(ー)

「普通名詞＋は」：ヒト(人)＋ワ→ヒトア

「抽象名詞＋は」：コト＋ワ→コトア

「格助詞＋は」：ト＋ワ→タ(ー)

ノワ→ノア・ナ(ー)

「抽象名詞＋は」：モノ＋ワ→モノア

「準体助詞＋は」：ノ＋ワ→ナ(ー)

レワ→レア・レヤ・リヤ

「人称代名詞＋は」：オレ(己)＋ワ→オレア

「動詞連用形＋は」：ワスレ(忘)＋ワ→ワスレヤ

「指示代名詞＋は」：ソレ(夫)＋ワ→ソリヤ

上記リストに示されるように、ある前接音節を含む各語類とそのそれぞれに対応する融合型との間にはかなり明瞭な関係が存することが分かる。このように、ある前接音節が異なる複数の語類に属している場合、それらを互いに区別すべくそれぞれ別の融合型を取る傾向が見られるということは、結果から見れば、属する語類が多い前接音節ほど、係助詞「は」との融合化における融合型のバラエティも多くなると言えるだろう。

3. 3. 前接語からの分析

今までの考察によって、係助詞「は」の融合化において、その前接語の性質が大きく関与していることが明らかとなってきた。

そこで、本節では、係助詞「は」の前接語について、さらに細かく検討を加えていくことにしよう。ただし、今回は紙幅の関係もあり、特に前接語が「体言」と「用言」の場合について述べることにしたい。

3. 3. 1. 体言

体言を前接語とする融合形の用例数は303で、その融合型別内訳は次の通りである。

- ①w脱落型：18(5.9%) ②ヤ転化型：3(1.0%) ③拗音化型：282(93.1%)
④ア列音化型：×

これを見ると、③拗音化型が9割以上の圧倒的な占有率を誇っていることが目を引くが、具体的語例を確認してみると、この③拗音化型全282例中272例(96.5%)までが指示代名詞「これ・それ・あれ」の融合化例となっている。逆に、指示代名詞「これ・それ・あれ」の融合型の種類を見てみると、例外なく272例のすべてが③拗音化型を取っている。

このことから、指示代名詞「これ・それ・あれ」の融合形は完全に「コリヤ・ソリヤ・アリヤ」の形に固定化して、それが拗音化型の用例のほとんどをしめており、その出現回数¹の群を抜く多さ——体言全体の融合化例の89.8%と、実に9割に達する——とも相俟って、他とは性格を大きく異にする存在だと言える。その要因についてはあらためて考える必要があるが、いずれにしても、この「コリヤ・ソリヤ・アリヤ」を一応別にすれば、

- ①w脱落型：18(58.1%) ②ヤ転化型：3(9.7%) ③拗音化型：10(32.3%)
④ア列音化型：×

のように、①w脱落型と②ヤ転化型とを合わせると67.8%となってその大半をしめることになる。

この①と②の場合を簡単に図式化して示せば、

- ① 体言+ワ → 体言ア ② 体言+ワ → 体言ヤ

となり、融合化に際しても前接語の体言部分の語形がまったく破壊されずに保存されていることが分かる。その点、たとえ③拗音化型の場合にしても、

7 「わたしや[シヤ]^{〔わらだな〕}薬店の子ぢやないわ」(猫413-10)

のように、前接語の語形の痕跡は残るので非融合形への復元は容易である。他方、前接語の語形が完全に破壊されてしまう④ア列音化型の融合例が1例も見えないことも、ここで決して見逃すことのできない事実である。

以上から、前接語が体言の場合、その融合化においても体言の語形を保とうとする顕著な傾向が認められると言えるだろう。

3. 3. 2. 用言——動詞

続いて、前接語が用言の場合を見ていくが、ここでは用言全体の用例数のほとんどをしめる動詞——全208例中188例(90.4%)——を特に取り上げることにしたい。

まず、動詞——より細かく言えば、動詞連用形——の融合化した実例をつぶさに観察し

とみると、年齢や性別・階層を問わず多くの人に使用されていて、しかも全用例が否定表現中で用いられていることが注目される。さらに、

8 「まだ外に何か^{ほか}仰^なしやりや^{おつ}[リヤ]しなかつたかい」(明303-10)

9 「余り出来方が早いので御驚ろき^{あんな}なさりや^で[リヤ]しなくつて」(三555-14)

のように、敬語——この場合は「仰しゃる」「なさる」——使用の箇所でも普通に融合を起こしていることを考え合わせると、当時、『動詞連用形+は』融合形+否定表現という表現形式が確立していて、待遇的な要素のいかに問わず、普段の会話においては定型的とも言うべき融合化現象を起こしていたものと思われる。

なお、「動詞連用形+は」の融合型には、

②ヤ転化型：イイ(云)+ワ+シナイ→イイヤシナイ

③拗音化型：アリ(有)+ワ+シナイ→アリヤシナイ

の2通りの型が見られるが、③拗音化型にはその語形の長くなりがちな上記表現形式における語形を短縮させる発音経済的表現効果が、②ヤ転化型にはより響きの強い「ヤ」へ変化することで、

10 「〈前略〉英雄なんか一人も^出やしな^いい。出たつて誰も英雄と立てやしな^いい。〈後略〉」(猫551-14)

のように否定語調を強める効果が、それぞれ認められる。

上述のように、「動詞連用形+は」には融合型として②ヤ転化型と③拗音化型の2型が現れるが、全用例数(188例)の内訳を見ると、②ヤ転化型113例(60.1%)・③拗音化型75例(39.9%)となっている。全体的傾向としてヤ転化型が優勢な状況にあると言えるが、特に動詞連用形語尾がエ列音の場合は「考エヤ」「立テヤ」のように、例外なくヤ転化型で一定している。一方、動詞連用形語尾がイ列音の場合は、「リ」の時こそ「有リヤ」のように拗音化型のみ現れるものの、「リ」以外の音節では、「居(イ)ヤ」「感ジヤ」のようにヤ転化型で出現するものが全81例中70例(86.4%)と、その大半をしめている。ちなみに、前接音節が「キ」「シ」の場合は、それがカ変/サ変動詞連用形語尾の時だけ「キヤ」「シヤ」のようにヤ転化型が現れ、しかもそれで一定している。

これらのことから、表現形式『動詞連用形+は』融合形+否定表現は、全体として、『動詞連用形ヤシナイ』という形⁽⁶⁾に固定化しつつある傾向が看取される。

この「動詞連用形ヤシナイ」に固定化する傾向について要因として考えられるのは、第一には、動詞連用形語尾がエ列音の場合はすでに「動詞連用形+ヤ」の形で完全に安定しているため、それへの類推により、動詞連用形語尾のイ列音もエ列音の勢力に引かれてヤ転化型が現れるということである。第二には、ヤ転化型には強い響きが感じられることで

否定語調——不満・あきらめ・怒り・軽蔑など否定的な感情をこめて用いられる——を強める効果が認められることである。これらが両々相俟って〔動詞連用形ヤシナイ〕が多用されるに伴い、そこに、新たに〔動詞連用形〕+〔ヤシナイ〕という表現ユニットの再分析化の傾向が芽生えるようになったことが、後の文法化した取り立て否定形式「Vヤシナイ」に繋がる結果をもたらしたものと推測される。

なお、現代語における取り立て否定形式「Vヤシナイ」の文法化の問題については、竹内(2014)・廣永(2005)などに詳しい。竹内(前掲)によれば、

「やしない」は「食べ・は・し・ない」から「食べ・やしない」のように、シンタグマティックな関係にある形態素群が、音韻変化を伴い再分析された結果、文法範疇に属する単一の語彙項目へと変じたと見ることができる。すなわち、文法化が生じていると見ることができる。(139頁)

といい、この考え方に従えば、漱石作品当時——明治末期～大正初期——の東京語において、「動詞連用形ヤシナイ」という表現形式は、まさにその文法化進行中の段階にあったことが窺える。

3. 4. 単音節語/語形からの分析

一般に、音節数が少ないほど語の同定は難しくなると思われる。そこで、今回収集した全融合例の中から特に単音節語/語形を抽出し、その用例数を作品の発表順——『吾輩は猫である』→『三四郎』→『それから』→『明暗』——に従って時系列的に示せば、以下のようになる。

上一段動詞「居る ⁽⁷⁾ 」連用形イ	イ + ワ → イヤ	2 → 3 → 2 → 5
下一段動詞「出る」連用形デ	デ + ワ → デヤ	1 → × → 1 → ×
カ変動詞「来る」連用形キ	キ + ワ → キヤ	2 → × → 4 → 5
サ変動詞「する」連用形シ	シ + ワ → シヤ	6 → 1 → 4 → 1
格助詞「と」	ト + ワ → タ(一)	9 → 2 → 1 → ×
格助詞「に」	ニ + ワ → ニヤ(一)	26 → 3 → 2 → 46
準体助詞「の」	ノ + ワ → ナ(一)	4 → 1 → × → ×

ここから明らかなように、上記7者のうち、元の語形が完全に破壊されたア列音化型のト + ワ → タ(一)、ノ + ワ → ナ(一) 2者の融合例は徐々に減少していき、漱石最後の作品『明暗』に至っては、言語量が最も多い⁽⁸⁾にもにもかかわらず、両者とも全く出てこなくなっている。それに対し、元の語形が完全に残るヤ転化型のイ + ワ → イヤ、デ + ワ → デヤ、キ + ワ → キヤ、シ + ワ → シヤの4者、および元の語形の名残りをとどめる拗音化型のニ + ワ → ニヤ(一)には、そのようなきれいな傾向は認められない。

この事実は、係助詞「は」の融合化が徐々に、元の語形が認識できないような融合型の

出現を抑える方向に向かって変化していったこと、換言すれば「語の同定を容易化する傾向」を示すものとして注目に値しよう。

そのような観点から見ると、前述した、「動詞連用形+は」の融合型が前接語の元の語形を完全に保存するや転化型に固定しつつある傾向も、この「語の同定を容易化する傾向」の表れとして解される。

加えて、これまた前述した、ある前接音節が相異なる複数の語類に属している場合、それらを互いに区別すべくそれぞれ別の融合型を取る傾向も、やはりこの「語の同定を容易化する傾向」の一環として捉えられる。これについて、今、全融合例中で最もバラエティに富んだ3通りの融合型が現れる前接音節「レ」を取り上げ具体的に観察してみよう。

前接音節として「レ」を有する語類としては、人称代名詞・指示代名詞・動詞連用形の3種があるが、下記の図式に示されるように、そのそれぞれが異なった融合型として現れ、互いにそのカタチの違いで明確に区別されることが分かる。

非融合形		融合型	融合形	語例	
	→	①w脱落型	レア	……	己 ^お れあ (人称代名詞+は)
レワ	→	②や転化型	レヤ	……	知れや (動詞連用形+は)
	→	③拗音化型	リャ	……	そりや[リャ] (指示代名詞+は)

4. おわりに

上来、夏目漱石の小説『吾輩は猫である』『三四郎』『それから』『明暗』における係助詞「は」の融合化の具体的な様相について、前接音節と前接語を中心に考察を行ってきたつもりである。その過程で特に、個々の多くの現象を統一的に説明できる「語の同定を容易化する傾向」を見出したことは大きな収穫であった。

そこで、稿を閉じるにあたり、あらためてこれまでの検討結果を振り返り、「語の同定を容易化する傾向」の観点から簡略にまとめておこう。

すなわち、明治末期から大正初期にかけての東京語における係助詞「は」の融合化に関し、

- (1) 全体的特徴として、や転化型と拗音化型が多数派をしめることによって、前接音節の語形が完全に壊されることがないように変化する強い傾向が示されている。
- (2) ある前接音節が相異なる複数の語類に属している場合、それらを互いに区別すべくそれぞれ別の融合型を取る傾向が見られる。
- (3) 前接語が体言の場合、融合化においてもその語形を保とうとする顕著な傾向が認められる。
- (4) 前接語が動詞連用形の場合、融合化においてもその語形を完全に保存するや転化型の「動詞連用形+シナイ」という表現形式に固定化しつつある傾向が見られる。
- (5) 前接語が単音節語/語形の場合、融合化において元の語形が認識できなくなるア列音化型の出現を抑える方向に向かって徐々に変化していった事実が観察される。

などの諸点において「語の同定を容易化する傾向」が体现されているものと考えられる。

今回は限られた資料による考察であったため、本稿で明らかにした、係助詞「は」の融合化における「語の同定を容易化する傾向」については、より多くの資料に基づき、共時的にも通時的にもさらに綿密な分析を行っていく必要があるが、今後の課題とする。

【注】

- (1) その際の最も根本的な問題として、テキストに現れる具体的な表記と実際の音声との関係ということがあるが、これについて機械的に処理することは難しく、『吾輩は猫である』を扱った小松(2013)等の具体的な処理方法を参考にしながらも、最終的には各用例ごとに個別に判断を行った。例えば、テキストでは拗音が小書きされないため「や」が直音か拗音かは表記だけからでは判別できない。しかし、テキストに「来やしない」とあった場合、これが「キヤシナイ」という拗音を表していると考えるのはきわめて不自然なので、これは「キヤシナイ」という直音を表していると推定する、あるいは、その箇所だけからでは判断が難しいような場合は、他の箇所の表記を手がかりにそこから類推する等々、一例ずつ個別的に判定を下していった。
- (2) 小松(2002a)(2013)、中沢(2016)、上坂(2019)など先行研究から得られた知見を総合すれば、これらテワ・デワの融合率は化政期江戸語の時点ですでに際立って高く、明治東京語になると話し言葉では融合形の方が普通であって、非融合形を使うのはむしろ特別な表現効果が求められる場合とされるからである。ちなみに、中沢(前掲)によれば、『浮世風呂』におけるテワ・デワを合わせた融合率は男性49%・女性65%で、すべての融合形のほぼ半数以上をしめるといい、上坂(前掲)によれば、二葉亭四迷『浮雲』での融合率はテワ78%・デワ94%、夏目漱石『三四郎』ではテワ85%・デワ91%に上るという。
- (3) 各語例末尾〔 〕内の数字はそれぞれの延べ用例数を示す。語例の表記についてはテキスト通りを原則としたが、煩雑化し見づらくなってしまう場合には通覧性にも配慮し、ある程度の単純化を施した。例えば、多様な表記形で現れているような語例については、見やすくなるようそれらを適宜簡略化した形で掲出した。また、具体的な語例整理の段階で以下のような処理を施した。(1)補助動詞「いる(居)」は本動詞と区別するため「～て」を前に付した形で表示した。(2)「動詞連用形+接続助詞テ」はいわゆる動詞テ形として動詞連用形の一つと見なした。このテが「飲んで」のように連濁の結果デとなった場合もこれに準じた。(3)受身/自発/可能/尊敬の助動詞「(ら)れる」、使役の助動詞「(さ)せる」は前接動詞と一体のものとしてその全体を動詞と見なした。(4)打消の助動詞「ない」、願望の助動詞「たい」は実質的に形容詞型活用のためそれらが付された全体を形容詞と見なした。
- (4) 挙例は可能な限りテキスト通り示すことを旨としたが、必要に応じて下線を引いたり括弧内に注記を施したりした。その所在については、末尾に「作品名の頭文字・

テキストの頁数・行数」の順で表示した。

- (5) 基本的に品詞による語分類であるが、体言については必要に応じてさらに下位分類を施したため、「品詞」ではなく「語類」と呼ぶことにした。
- (6) ここでは、「～やしまい」「～やしません」等、やに後接する「しない」以外の否定表現の諸形も含めてこの図式で統一表示することとする。
- (7) ここでは、本動詞だけでなく補助動詞の場合も含める。
- (8) 試みに漱石4作品の分量をテキスト本文部分の総頁数で示せば、猫566・三336・そ341・明686となる。

【主要参考文献一覧】

〈用例採集・引用テキスト〉

『定本漱石全集1 吾輩は猫である』岩波書店、2017年（第3刷）

『定本漱石全集5 坑夫・三四郎』岩波書店、2017年（第1刷）

『定本漱石全集6 それから・門』岩波書店、2017年（第1刷）

『定本漱石全集11 明暗』岩波書店、2017年（第1刷）

〈研究文献〉

岡部嘉幸(2019)「近世江戸語における指定表現の否定形—近世上方語および近代東京語・京阪語との比較」金澤裕之・矢島正浩編『SP盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院

———(2020)「洒落本の江戸語と人情本の江戸語—指定表現の否定形態を例として—」『国語と国文学』96-5

上坂彩奈(2019)「明治末期東京語における係助詞「は」の融合現象と訛意識—夏目漱石『三四郎』を中心に—」『語文論叢』34

小松寿雄(1974)「『一読三歎当世書生気質』の江戸語的特色」『埼玉大学紀要 教養学部編』9

———(1985)『江戸時代の国語 江戸語—その形成と階層—』東京堂出版

———(2002a)「江戸東京語における女性の係助詞ハと連母音アイの融合」『国語と国文学』79-8

———(2002b)「明和～天保期江戸語における男性の係助詞ハの融合」近代語学会編『近代語研究11』武蔵野書院

———(2006)「会話篇に見る幕末の江戸語—音節融合を中心に—」近代語学会編『近代語研究13』武蔵野書院

———(2013)「『吾輩は猫である』における係助詞「は」の融合転化」近代語学会編『近代語研究17』武蔵野書院

———(2015)「明和の洒落本における係助詞ハの変容—付. 浮世風呂・浮世床との比較—」近代語学会編『近代語研究18』武蔵野書院

竹内史郎(2014)「『Vヤシナイ』について—現代共通語における取り立て否定形式の文法化—」『成城国文学論集』36

中沢紀子(2016)「『浮世風呂』における助詞融合現象」『帝京大学文学部紀要 日本文学』
47

廣永智子(2009)「Vヤシナイの解釈と用法」九州大学文学部言語学・応用言語学専攻卒業
論文 <<http://www.gges.org/library/class1/docuclass1/soturon/Hironaga2009.pdf>>

古田東朔(1977)「『安愚楽鍋』の登場人物とその音訛」松村明教授還暦記念会編『国語学
と国語史』明治書院

———(1978)「『安愚楽鍋』における登場人物の音訛の度合」『東京大学人文科学科紀要』
67

前田桂子(2002)「噺本における助詞「は」の融合現象」近代語研究会編『日本近代語研究
3』ひつじ書房

松村 明(1957)『江戸語東京語の研究』東京堂

【付記】

本稿は、2020年12月千葉大学大学院人文公共学府に提出した修士学位論文の内容の一部
に基づくものである。

(でん・りり 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程2021年修了)

【別表】漱石4作品における係助詞「は」の融合パターンと語例一覧 (12)

非融合形	融合形	語 類	吾輩は猫である	三 四 郎	そ れ か ら	明 暗
イワ	イヤ	動詞連用形＋は	云や[3]、居や[1]、～て居や[1]、間に合ひや[1]	居(ゐ)や[2]、～てゐや[1]	～てゐや[2]	居や[1]、～てゐや[4]
	ヤ	動詞連用形＋は	構や[5]、貰や[1]	云や[1]、構や[1]	云や[1]、思や[1]、構や[2]、狂や[1]、違や[1]	云や[10]、思や[1]、構や[1]、貰や[1]
エワ	エヤ	動詞連用形＋は	食へや[1]	—	—	考へや[1]、拵へや[1]
	キヤ	動詞連用形＋は	来(き)や[2]、出来や[2]	—	来や[4]、できや[1]	来や[5]
キワ	キヤ	動詞連用形＋は	行きや[1]、頂きあ[1]、驚きや[1]、書きや[1]、聞きや[1]、弾きや[1]	—	驚きや[1]、届きや[1]	泣きや[1]、吐きや[1]
		普通名詞＋は	時や[1]	—	—	時や[2]
クワ	クア	人称代名詞＋は	僕あ[4]	—	—	—
	カ	形容詞連用形＋は	欲しか[1]	—	暑か[1]、早か[1]、好か[2]	有難か[1]、痛か[2]、なか[2]、不味か[1]、宜(可)か[4]、解らなか[1]、悪か[1]
ケワ	カ一	形容詞連用形＋は	聞きたかあ[1]、よかあ[1]	—	—	—
	ケヤ	動詞連用形＋は	—	—	—	穿けや[1]、見つけや[1]
シワ	シア	抽象名詞＋は	—	—	—	訳や[3]
		普通名詞＋は	教師あ[1]	—	—	—
	シヤ	動詞連用形＋は	しや[6]	しや[1]	しや[4]	しや[1]
		人称代名詞＋は	私(わた)しや/私や[4]	—	私や[1]	—
	シャ	動詞連用形＋は	—	—	—	話しや[1]
ジワ	ジヤ	副詞＋は	—	—	少しや[1]	少しあ/少しや[5]
		動詞連用形＋は	—	—	—	感じや[1]
セワ	セヤ	動詞連用形＋は	—	—	—	着せや[1]、出せや[1]、持たせや[1]
		動詞連用形＋は	—	—	—	—
ゾワ	ザ	副助詞＋は	なんざ[9]	—	—	—
	ザ一	副助詞＋は	なざあ[1]、なんざあ[5]	—	—	—
チワ	チヤ	人称代名詞＋は	—	—	—	此方や[1]
ツワ	ツア	指示代名詞＋は	—	—	—	そいつあ[1]
テワ	テヤ	動詞連用形＋は	立てや[1]	思つてや[1]	生きてや[1]、云つてや[1]、考へてや[1]	云つてや[4]、疑つてや[1]、思つてや[2]、澄ましてや[1]、違つてや[1]、要求してや[1]
						—
デワ	デヤ	動詞連用形＋は	出や[1]	—	出や[1]	飲んでや[1]

【別表】漱石4作品における係助詞「は」の融合パターンと語例一覧 (22)

トワ	トア	普通名詞＋は	人あ[2]	—	—	—
	タ	抽象名詞＋は	事あ[3]	—	—	—
	ター	格助詞＋は	た[5]	た[2]	た[1]	—
ニワ	ニヤ	格助詞＋は	たあ[4]	—	—	—
	ニヤー	格助詞＋は	にあ/にや[24]	にや[3]	にや[2]	にや[46]
	ノア	形容動詞連用形＋は	綺麗にや[1]	—	—	—
ノワ	ナ	抽象名詞＋は	ものあ[1]	—	—	—
	ナー	準体助詞＋は	な[1]	な[1]	—	—
	ミヤ	準体助詞＋は	なあ[3]	—	—	—
メワ	メヤ	人稱代名詞＋は	君や[1]	—	—	—
	ラア	動詞連用形＋は	—	—	—	苛めや[3]、締めや[1]
	ラワ	普通名詞＋は	面(つら)あ/面らあ[2]	—	—	—
リワ	リヤ	人稱代名詞＋は	おらあ[1]、こちとらあ[1]	—	—	—
	リヤ	動詞連用形＋は	ありあ/有(あ)りや[13]、変りや[2]、困りや[3]、とりや[1]、なりや[1]、分りや[3]	ありや[7]、知りや[1]、なさりや[1]、分りや[2]	ありや[4]、分りや[1]	有りや[14]、要りや[1]、疑ぐりや[1]、怒りや[1]、仰しやりや[1]、かかりや[1]、困りや[2]、解/分りや[4]
	レア	格助詞＋は	—	—	—	よりや[1]
レワ	レア	人稱代名詞＋は	己(お)れあ[1]	—	—	—
	レア	動詞連用形＋は	得られや[1]、食はれや[1]、たべられや[1]、遣入れや[1]	思はれや[1]、知れや[1]	知れや[1]、痛快がられや[1]、忘れや[1]	～てあられや[1]、壊れや[1]、知れや[2]
	リヤ	指示代名詞＋は	有(あ)りや[6]、是あ/是(こり)や[31]、そりあ/夫(そり)や[62]	ありや[4]、こりや[4]、夫(そり)や[12]	ありや[7]、是(こり)や[4]、夫(そり)や[112]	—
ワワ	ワア	普通名詞＋は	世話あ[1]	—	—	—